

## 公共図書館における高齢者の情報探索行動

石村 沙希

2015年10月1日現在、日本の総人口に占める65歳以上人口は26.7%と世界で最も高い高齢化率となっているが、そのうち、健康上の問題で日常生活に影響のある人は4分の1程度である。このような状況において、高齢者観について、社会的弱者などといった福祉・保護イメージと生活者・学習者・活動者などといった教育・活動イメージという二重性が問われており、図書館利用者としての高齢者論が必要になってきているという。だが、高齢者が実際に図書館でどのような行動をしているかに関する調査は少ない。今日、教育・活動イメージで捉えることのできる高齢者の公共図書館における情報探索行動を調査し、情報探索の際の実際の行動やニーズなどといった意識を明らかにし、それらに対応していく必要がある。

そこで、高齢者の公共図書館における実際の行動やその際の意識を明らかにし、そこから高齢者対象の図書館サービスの課題や新たなサービスの方向性を示すことを本研究の目的とする。

本研究では、公共図書館における高齢者を対象とした情報探索行動調査として、実験とインタビュー調査を行った。調査は札幌市中央図書館にて実施し、調査参加者は55歳以上の男女12名だった。実験ではタブレット端末を用いる文献探索ゲームを行い、実験中の調査参加者の行動は調査者が観察・記録した。実験終了後にインタビュー調査を行った。実験前の調査参加者のタブレット使用経験、実験中の調査参加者の行動、実験中の調査参加者の意識、実験後の調査参加者の意識について半構造化法で尋ねた。

調査結果として、公共図書館内で情報を探す時、最初に行う探索方法としてはOPAC端末を用いた探索が一番多いことがわかった。その理由として「OPAC端末の存在を知っていた」ということが挙げられた。しかし、OPAC端末や請求記号を用いた探索が困難であったり、パスファインダーの存在に気が付かなかつたなど、情報探索行動の際の困難なども明らかになった。しかし、実験を通して請求記号の意味を学ぶことができたという参加者や、今回の実験を通して図書館を利用したいと思うようになったという意見も多く見られた。

以上のことから、高齢者対象の図書館サービスの課題は、OPAC端末や請求記号などといった情報検索ツールの利用方法の習熟度あるいはその認知度の低さが挙げられる。文献探索ゲームのような、実際に図書館内のものを用いた探索を体験することにより、高齢者の情報探索の支援が促進されると思われる。

(指導教員 溝上智恵子)